



Title	公立学校における母語教室活動を学校に「開く」取り組み：母語教室公開イベント「タップカムDAY」の実践報告
Author(s)	近藤, 美佳
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2022, 18, p. 81-93
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91726
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《実践報告》

公立学校における母語教室活動を学校に「開く」取り組み¹⁾

— 母語教室公開イベント「タブカムDAY」の実践報告 —

近藤 美佳（大阪大学）

m_kondo.hmt@osaka-u.ac.jp

A School-Wide Effort to Share Activities of the Mother Tongue Class:

A Practical Report on *Thập Cẩm DAY*, Open Day in Mother Tongue Class

KONDO Mika

要 旨

本稿は、神戸市立 S 小学校内に設置されたベトナムルーツの子どもを対象とした母語教室である H 教室において、2019 年度に実施した母語教室公開イベント「タブカム DAY」の実践について報告するものである。「タブカム DAY」では、H 教室生が「ホスト」を務め、日本人児童を「ゲスト」として迎えた。このように場面の構造を変化させることで、H 教室生を場の「中心」に据えたまま他者の目（周囲の承認）を獲得することができ、また「文化的差異」を「引き受けさせられる『客観化された本質』」ではなく「主体的に活用する『手段』」に変換することが可能となった。母語教室の活動においては、そこに通う子どもを「〇〇にルーツを持つ子ども」としてひとくくりにせず、その中で多様性を尊重することが大切である。そして、そのような姿勢が学校全体で共有されれば、学校全体で多様性の実態を学ぶ機会を得ることができると思う。

Abstract

The paper reports on “*Thập Cẩm DAY*,” an open day at a mother tongue class H for children with Vietnamese roots at S elementary school in Kobe in school year 2019-2020. On “*Thập Cẩm DAY*,” H class students worked as “hosts” and welcomed Japanese children who came to the event as “guests.” This change in the structure made it possible for the H class students to get approval from others while keeping them at the “center” of the field. H class students were also able to reinterpret “cultural differences” as a “means” they can use through their own initiative rather than as an “objectified nature” that is forced upon them by others. In mother tongue class, it is important not to consider children to be members of a homogeneous group as “children with roots in XX,” but to respect the diversity among them. Sharing such an attitude throughout the school will enable all students have the opportunity to learn about the reality of diversity.

キーワード：在日ベトナム人児童、母語教室、公立学校、多文化共生、国際理解教育

1. はじめに

神戸市立 S 小学校は外国人集住地区に位置し、外国にルーツを持つ児童が多数在籍する小学校である。全校児童約 240 名のうち、1 割弱の子どもがベトナムにルーツを持つ。S 小学校内にはベトナムルーツの子どもを対象とした母語教室²⁾ (以下、H 教室と呼ぶ) が設置されており³⁾、筆者は 2016 年度よりこの教室の講師を務めている。

本稿は、この H 教室において 2019 年度に実施した母語教室公開イベント「タプカム DAY」の実践について報告するものである。まず、授業計画・記録、フィールドノート⁴⁾、およびイベント実施後の参加者アンケートの結果に基づいてこの取り組みの実施について記述し、公立学校内に設置された母語教室の存在意義および母語教室活動を学校全体に「開く」ことの意義を検討する。

2. 母語教室公開イベント「タプカム DAY」考案の背景

2.1 H 教室の活動概要

H 教室の主な活動内容は、週 1 回の放課後学習 (1、2 年生は 5 時間目終了後、3 年生以上は 6 時間目終了後にそれぞれ 45 分間、ベトナムの言語や文化に関する学習を行う)、校内の国際理解教育活動における文化発表 (年 1 回)、地域の多文化イベントにおける文化発表 (年 1 回) である。また、年度初めと年度終わりにはベトナム人家庭の保護者のみを対象とした保護者会を実施している。本稿が主な考察対象とする 2019 年度には、低学年クラス (1-2 年生) には 7 名、中高学年クラス (3-6 年生) は 14 名の子どもが参加していた。

母語・継承語教育はモチベーションの創出と持続が難しいことがこれまでの多くの研究で指摘されてきたが (中島, 2016 他)、H 教室も例外ではない。特に 2018 ~ 2019 年度はそれが顕著で、高学年の複数の子どもたちが乱暴な言葉で不満を訴えることが続いた。「はよ帰りたい」「ベトナム語なんかやって意味あんの」「H 教室、おもんない。時間の無駄」、こんな言葉が毎週のように講師である筆者に浴びせられていたし、教室内で子ども同士の衝突が起こることも少なくなかった。このような状況が続く中、以前は向 H 教室的だった下級生たちまでも「男子たちがやなこと言うから H 教室いややねん」(4 年女兒) 等と口にするようになり、徐々に反 H 教室的な態度を見せるようになっていた。

H 教室はその 10 年以上に亘る活動における関係者の努力の末、その存在の重要性を S 小学校全体に浸透させることに成功しており、その証拠に常に複数の教員が H 教室を見守る協力体制が出来上がっていた⁵⁾。しかし、教室に関わる子どもも教員も入れ替わっていく中で、この頃には「ベトナム人保護者はどうして懇談の時間を守れないのか」「どうして警報が出ていても子どもを学校に来させてしまうのか」「どうしてあの子は作文が書けないのか」等、在日外国人保護者とその子どもたちが抱える課題についての認識の薄さが窺える発言も漏れ聞こえるようになっていた。また、日本人の子どもたちが H 教室を覗きに来ては「H 教室って何やってるの?」「〇〇ちゃんはなんで H 教室行かないあかんの?」などという問いを筆者や H 教室生に投げかける場面も度々見られるようになった。

2.2 「発表会」への反発や抵抗

S 小学校では毎年秋頃に国際理解月間が設けられ、そのまとめとして全校集会が実施されるが、その集会において H 教室生による発表時間が確保されている。近年は、低学年がベトナム語劇を、中高学年が獅子舞を披露している。さらに、ここで発表した内容を地域の多文化共生イベントにおいても披露し、このときには家族も応援に駆け付ける。この一連の流れは H 教室の年間活動におけるハイライトであり、気合を入れて取り組む子どもも多い。しかしその一方で、練習期間中は子どもたち同士のもめごとが増えたり、イベント後の振り返りで感想を語れない、語らない子どもがいたり、この流れに“のれない”子どもも少なくない。他校の子どもではあるが、児童集会における学習発表の準備をしている最中に、講師である筆者に対して「(このような文化発表をすると) あいつ、ちょーしのってるって思われる」と漏らした子どもがいた(5 年女児)。聞けば、実際に特定の誰かからこのようなことを言われた経験があるわけではないものの、肌でこうした空気を感じ取っているようだった。このように、学校が実施する「国際理解教育」の中に位置づけられた「発表会」(以下、「発表会」とする)は、子どもたちの動機づけとなると同時に、ある種の抵抗を感じさせてしまう場合もある。

このような抵抗を生む要因を 2 点挙げておきたい。まず 1 点目は、「発表会」が、「“博物館主義的な”一文化を鑑賞の対象としてしまうような」(阿久澤, 1998) 実践となってしまう場合である。この場合、日本人児童＝鑑賞する者、外国人児童＝鑑賞される者という構造を生み出してしまい、竹田(2012)が指摘するように、日本人の子どもたちに外国人の子どもたちを自分と異なった存在として捉えさせ、結果として子どもと子どもの距離を広げることになってしまう。2 点目は、「〇〇にルーツを持つ」子どもの多様性を十分に加味できていない場合である。高橋(2013)は、中国にルーツを持つ子どもの中には、中国語や中国文化を母語、母文化として押し付けられることに違和感を覚える子どももあり、その違和感が反発や拒否、無関心やあきらめといった形で表出されると述べている。ルーツがある国の言葉や文化をどの程度「自分のもの」として捉えられるかは子どもによって当然異なるはずであるが、このことがこれまで十分に配慮されていただろうか。

S 小学校の「発表会」の実践も上記の 2 つの要因を孕んでいたと考えられ、それが普段の教室活動以上の反発や抵抗を生じさせてしまっていたのである。

2.3 母語教室活動を学校全体に「開く」試みの模索

上述の高橋(2013)は、子どもたち一人ひとりが見えなくなっている状況を改善すべく、これまでマイノリティだけに開かれていた実践をマジョリティとの協働活動として捉え直すことを提案している。H 教室においても、H 教室が S 小学校の中で「閉じた」空間、「見えない」空間となっていることが様々な歪みを生んでいるように感じられる。そこで、H 教室を学校全体に「開」き、その活動を S 小学校全体と共有する試みを模索することにした。S 小学校の教員と検討を重ねた結果、H 教室の活動を一般児童に向けて公開する日を設けることが決まり、「ごちゃまぜの、ミックスの」を意味するベトナム語 ^{タブ カム} *thập cẩm* [十錦] を冠し「タブカム DAY」と名付けた。こうして、母語教室公開イベント「タブカム DAY」が考案された。

3. 母語教室公開イベント「タブカム DAY」実践の内容と結果

2019 年度、2 度の「タブカム DAY」を試験的に実施した。その実践過程を以下に報告する。

3.1 2019 年度 第 1 回タブカム DAY

低学年クラスは、講師である筆者が司会進行を務めた。まず H 教室生がそれぞれ自分の好きな果物について、「わたしは〔名前〕です。わたしは〔果物〕がいちばん好きです。〔果物〕は〔特徴〕です」とベトナム語でスピーチした。そして、スピーチで挙げた果物の名前を参加者とともに学習し、最後に全員でフルーツバスケットを行った。フルーツの指定のために、フルーツの画像、ベトナム語表記とフリガナが書かれていた札を配布した。なお、この札の中身のカードは、イベント終了時に参加者に持ち帰らせた。

図 1 フルーツバスケットに使用したフルーツ札



中高学年クラスは、6 年生が全体の司会進行や案内役を務めた。まず、6 年生主導で参加者全員に対してダーカウ⁹⁾体験を実施した。その後、6 年生の案内の下、参加者は 3～5 年生が実施する各体験ブース（バンブーダンス、ベトナムのあそび、ベトナム料理紹介、ベトナム語クイズ）を回って体験を行った。以上の実施概要を表 1 にまとめる。

表 1 2019 年度 第 1 回 タブカム DAY 実施概要

	低学年（1・2 年生）クラス	中高学年（3・6 年生）クラス
日時	2019 年 10 月 25 日（金）14:45 ～ 15:30	2019 年 10 月 25 日（金）15:45 ～ 16:30
場所	H 教室	H 教室 / 学習室 / 屋内広場
参加者	H 教室生 7 名、一般児童 14 名、教員	H 教室生 14 名、一般児童 25 名、教員
内容	1. 歌「Tập đếm（数え歌）」 2. 発表「わたしのすきなくだもの」 3. フルーツバスケット	1. ダーカウ体験 2. ベトナム紹介（バンブーダンス / ベトナムのあそび / 料理 / ベトナム語クイズ）

以上の内容を実施するために、低学年・中高学年クラスともに 1 か月ほどの準備期間を要した。低学年クラスは、果物の名前の学習から始め、少しずつ話す文を長くしていきながらスピーチの準備を進めた。作文の際には子ども自らが話したいと思う内容を最大限尊重し、子ども自身が既に持っているベトナム語の語彙・表現を繋げながら文章を作成するよう心掛けた。ベトナム語でのコミュニケーション力を持っている子どもからは発言を引き出し、子どもが発言した通りの文言を書き取って発表原稿とした。ベトナム語がほぼゼロである子どもには日本語で内容を考えさせ、その内容を他の子どもから支援を受けてベトナム語に置き換えたものを原稿とした。その際、必要に応じて、より単純な構造の文に言い換えたり、フリガナを振ったりするなどの足場かけを行った。練習でも本番でも、原稿を読みながら発表するか、何も見ずに発表するかはその場で子どもに判断させた。以下に実際の発表原稿の例を示す。

Con tên là [名前]. Con thích ăn dâu nhất. Quả dâu màu đỏ.

(わたしは[名前]です。わたしはいちごがいちばんすきです。いちごは赤いです。)

(1年男児、ベトナム語力 [中] 7)

Con tên là [名前]. Con thích ăn thanh long nhất. Trái thanh long màu hồng, màu xanh lá cây, màu trắng và có hạt màu đen.

(わたしは[名前]です。わたしはドラゴンフルーツがいちばんすきです。ドラゴンフルーツはピンクと緑と白で、黒い種があります。)

(1年男児、ベトナム語力 [高])

中高学年クラスには、最初に「タブカム DAY」という H 教室公開イベントを実施することを告げ、「友達に伝えたいベトナムのこと」をテーマに教室生自ら実施内容を考えるよう促した。1 学期の間に実施した文化体験（ダーカウやバンブーダンス等）、過去の学習や自分のこれまでの経験を踏まえてアイデアを出し合ったところ、クラスで5つのテーマが案として出たため、2～6 人のグループを組み、それぞれが選んだテーマに沿って発表内容を考えて、準備を進めた。実施場所や時間との兼ね合いから、ダーカウ体験のみ一堂に会して行い、それ以外の体験はブースに分かれて行うことに決めた。

イベントの周知は本番 10 日前となる 10 月 15 日に開始した。1, 2 年生は、クラス担任にタブカム DAY についての説明、参加申込書の配布・回収を依頼した。なお、1, 2 年生はタブカム DAY に参加すると帰宅時間が既定の時間を過ぎることになるため、参加には保護者の同意が必要となる。そのため、参加申込書に保護者の参加同意欄を設けた。3 年生以上は、H 教室生自身が各クラスでタブカム DAY について説明し、参加申込書を配布、申込書の回収まで行った。回収した申込書に基づいて、開催日時・場所とメッセージを記した招待状を作成し、参加者に渡した。準備過程を表 2 にまとめている。

表 2 2019年度 第1回 タブカムDAY 準備過程

	低学年（1・2 年生）クラス	中高学年（3・6 年生）クラス
1 学期	自己紹介の練習	ベトナム文化体験
9 月 20 日	歌の練習 / くだものの名前の学習	タブカム DAY の趣旨説明 / テーマ決め
9 月 27 日	歌の練習 / 文「わたしは〔果物〕がいちばんすきです。」の作文と練習	グループに分かれて練習・準備
10 月 4 日	歌の練習 / 文「〔果物〕は〔特徴〕です。」の作文と練習	グループに分かれて練習・準備
10 月 11 日	歌の練習 / 文「わたしは〔名前〕です。わたしは〔果物〕がいちばんすきです。〔果物〕は〔特徴〕です。」の作文と練習 / タブカム DAY の趣旨説明	グループに分かれて練習・準備
10 月 18 日	歌の練習 / 「わたしは〔名前〕です。わたしは〔果物〕がいちばんすきです。〔果物〕は〔特徴〕です。」の発表練習 / フルーツバスケットの予行演習	グループに分かれて練習・準備 招待状づくり

3.2 2019 年度 第 2 回タブカム DAY

低学年クラスでは、第 1 回目同様、H 教室生がベトナム語で発表を行い、その発表内容に基づいた遊びを行った。年明けに行った旧正月の学習の中で十二支を扱ったことにちなみ、第 2 回目のテーマは動物とした。そして、スピーチで挙げられた動物の名前を参加者とともに学習し、最後に全員でかるた遊びを行った。

中高学年クラスでは、毎年 12 月上旬に校内外で披露している獅子舞を参加者に体験してもらった。獅子舞を動かす際には「môt hai ba (1, 2, 3)」とベトナム語で掛け声を掛けながら動かした。体験の後には掛け声で使った 1～3 の数字に加えて 10 までの数字を参加者に紹介し、最後は全員で 1～10 の数字を使って親指ゲーム⁸⁾をして遊んだ。実施概要をまとめたものを表 3 に示す。

図 2 どうぶつかるた



表 3 2019 年度 第 2 回 タブカム DAY 実施概要

	低学年（1・2 年生）クラス	中高学年（3・6 年生）クラス
日時	2020 年 2 月 28 日（金）14:45 ～ 15:30	2020 年 2 月 28 日（金）15:45 ～ 16:30
場所	H 教室	体育館
参加者	H 教室生 7 名、一般児童 15 名、教員	H 教室生 14 名、一般児童 23 名、教員
内容	1. 歌「Ngày Tết quê em（故郷のお正月）」 2. 発表「わたしのすきなどうぶつ」 3. どうぶつかるた	1. 獅子舞デモンストレーション 2. 獅子舞体験&写真撮影 3. 親指ゲーム

続いて、準備過程についてである。低学年クラスは約 1 か月の期間を準備に費やすことができたため、第 1 回目とはほぼ同様の流れで準備を進めた。以下が、実際に発表原稿の例である。

Con tên là [名前]. Con thích mèo nhất. Mèo ăn cá.

(わたしは [名前] です。わたしはねがいばんすきです。ねこは魚を食べます。)

(1 年男児、ベトナム語力 [低])

Con tên là [名 前]. Con thích con rắn nhất. Con rắn dài quanh co, không có chân. Con rắn cắn, ăn trứng.

(わたしは [名前] です。わたしはへびがいばんすきです。へびは長くくねくねして、足がありません。へびは、かんだり、たまごを食べたりします。)

(2 年男児、ベトナム語力 [中])

しかし中高学年クラスは、校外学習等の予定が重なり、全員が揃って準備をする時間を十分に確保することが叶わなかった。そのため、発表直前に打ち合わせを数回した程度で本番を迎えることとなった。

イベントの周知は2月10日に開始した。周知の方法は第1回目と同様である。第2回目のタプカムDAYに向けての準備過程を表4にまとめる。

表4 2019年度 第2回 タプカムDAY 準備過程

	低学年（1・2年生）クラス	中高学年（3・6年生）クラス
2学期	（通常学習）	獅子舞
1月24日	歌の練習 / 日越の十二支の動物についての学習	（通常学習「旧正月について」）
1月31日	歌の練習 / 文「わたしは〔動物〕がいちばんすきです。」の作文と練習	（6年生校外学習、4年生学年閉鎖、検定試験受験による欠席2名。残る3名で通常学習）
2月7日	歌の練習 / 文「〔動物〕は〔特徴〕です」の作文と練習 / タプカムDAYの趣旨説明	タプカムDAYの趣旨説明 / 役割分担
2月14日	歌の練習 （修了パーティー ⁹⁾ の準備）	（6年生代休のため不在、3～5年生で修了パーティーの準備）
2月21日	歌の練習 / 文「わたしは〔名前〕です。わたしは〔動物〕がいちばんすきです。〔動物〕は〔特徴〕です。」の発表練習	タプカムDAY準備・練習

注（ ）内は第2回「タプカムDAY」の発表内容と直接関連しない学習内容

3.3 実践結果

3.3.1 参加した子どもたちの反応

2回のイベント終了後、参加した子どもたちを対象に簡単なアンケートを行った。その中で楽しかったかどうかを5段階で評価する欄を設けた。高評価を5点、低評価を1点と換算して平均を取ったところ、表5のようになった。

表5 アンケート結果

	低学年（1・2年生）クラス		中高学年（3・6年生）クラス	
	H教室生	H教室生以外	H教室生	H教室生以外
第1回目	4.57	4.64	3.57	4.52
第2回目	4.14	4.6	3.31	4.78

この結果より、「タプカムDAY」はH教室生にとっても参加者にとっても概ね好評であったと言える。中高学年クラスのH教室生のみ評価が他に比べて低い結果となっているが、これは高学年の反H教室的な子どもたちが低評価を付けたことによる。6年生のH教室生たちは自身の友人を誘うこともなかったため、6年生の一般参加者はいなかった。そのため、後述する自身の友達の参加により動機づけられるという過程も見られなかった。

自由記述欄では、H教室生からは「きょうのタプカムはいっぱいの人たちが来てくれてとてもうれしいです！！」（4年女兒）、「いがいときゃくがきてくれてよかったです」（6年女兒）等、友人たちの参加を好意的に捉える声が複数挙がった。H教室生以外の子どもの感想を見てみると、1回目

の感想には「たのしかった」「またきたい」等という声が主だったが、2回目の感想では「歌がじょうずだったよ」(2年女児)、「一年生の三人がまえにたってみんなのまえに立ってゆっていたのがすごかった(原文ママ)」(1年女児)等とH教室生の具体的な発表内容に言及する内容が増えた。中には個人名を挙げて賞賛や感謝を綴ったコメントも見られた。

また、その他特筆すべきこととして、日本人保護者からの関心を挙げたい。参加したきっかけとして母親に勧められたことを挙げた子どもが第1回目、第2回目で1人ずついた。上述の通り、低学年の参加申込書には保護者の参加同意欄が設けられていた。申込書を読んで興味を持った保護者が子どもにも参加を勧めたようだ。さらに、第1回目の活動時には実際に参観に来た保護者もいた。

3.3.2 能動的な学びの広がり

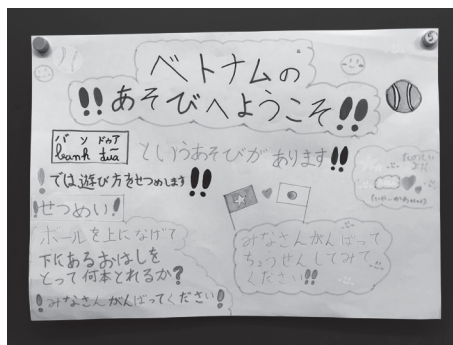
現在のH教室は、通常の学習の時間には子どもたちが最も得意とする「聴く」活動を主として行っており、子どもたちに文字を書かせる場面はあまり多くない。しかし、第1回「タブカム DAY」の準備期間中には掲示物にベトナム語を表記したいというニーズが生じ、子どもたちが自ら「先生、〇〇ってベトナム語でどうやって書くの？」等と質問してくる場面が出てきた。

「ベトナム料理」班は来日年数が浅く日本語を得意としない3人の子どもで構成されており、3人は自分で描いたイラストを見せながら、ベトナム語で好きな料理を紹介することを予定していた。しかし、準備が進むにつれ、「(ベトナム語で話すだけでは)みんながわからないから」と、3人で相談しながらイラストに日本語を書き添えるようになった。当日、3人がベトナム語で料理を紹介する姿を見て、「〇〇ちゃんの声、初めて聞いた」(5年女児)と筆者に話した子どもがいた。日本語を得意としないため普段の学校生活ではなかなか人前で話すことがない仲間が堂々とベトナム語で発表をする姿を見て、驚いたようだった。3人のうちの1人(4年女児)は、「じつは、みんなでおしょうかいしたらみんなきこえてるから私はうれしかったです(原文ママ)」(実際に、みんなに(ベトナム料理を)紹介したら、みんなが聞いてくれたから、わたしは嬉しかったです)と日本語で感想を書き残した。

「ベトナム語クイズ」班の2人は、教室内で積極的にベトナム語を使用する子どもではなかったが、クイズを作るためにそれぞれが知っているベトナム語の単語を思い出し、教え合っていた。そして、それをどのようなカタカナで書き取れば日本人の友人たちに伝わりやすいかを話し合い、工夫していた。さらに、より多くの友人に周知できるよう「ポスターを作りたい」と言い、クイズ以外の活動も進めていった。

第2回目「タブカム DAY」では、司会進行を4人の子どもが務めた。準備時間が充分でなかったため原稿は教員側で用意したが、必要に応じて読みやすく変更するように告げて渡したところ、子どもたちの発案により最初の挨拶はベトナム語で行うことになった。ベトナム語挨拶を最初に提案した子ども(4年女児)は、第2回目の感想として「ふつうにたのしかった」が、「しかいがむずかしかった」と残している。

図3 「ベトナムのあそび」班が作成した掲示物



このように、子どもたちの自主性に任せて「タブカム DAY」の準備を進めた結果、その準備のために言語を使用したいという動機やニーズが生じ、結果、子どもたちが自ら言語を使って活動の幅を広げていく姿が観察された。

3.3.3 友人の参加による動機づけ

自分の親しい友人を招くことによる動機づけは複数の子どもに見られたが、中でも顕著だった子ども（5年女兒）の例を示す。

彼女は、明るく人を巻き込む力があり、H教室の活動にも積極的に参加する子どもであった。しかし、2018～2019年度は1学年上の子どもたちの反H教室的な言動に心を痛め、H教室に対して居心地の悪さを感じるようになり、次第に自らも反H教室的な行動をとるようになった。具体的には、逃げ帰ってしまったり、声の大きいクラスメイトたちを引き連れて教室にやって来ては「一緒に遊びたい」「なんでH教室行かなあかんの」などと騒いだりする等の行動が見られた。第1回目のタブカムDAY準備時には、自ら大々的に友人に声を掛けることはなかったようだが、招待状の作成には積極的に取り組み、自分が「ゲストを招く」立場にあることを明確に意識している様子だった。本番では、自ら考えたベトナム語クイズを披露し、参加者を楽しませていた。第2回目実施時には、上記のクラスメイトたちを皆誘った。誘われたクラスメイトがさらに友人を誘ったようで、多くの仲の良い友人が参加した。クラスメイトたちは、獅子舞体験やゲームを楽しんでいる様子だった。第2回目のアンケートには、「楽しかった」理由を「友達おったから」と綴った。

低学年クラスでは、H教室生も参加者も楽しかった理由として活動内容（フルーツバスケット、かるた、歌）そのものを挙げるものがほとんどであり、参加者の参加理由も「ベトナムもしくはH教室への興味」がほとんどであった。一方、中高学年クラスになると、H教室生の感想には友人の存在への言及が目立ち、参加理由に「友だちに誘われた」ことを挙げる参加者も増える。また、クラスメイトの参加がなかった6年生のH教室生は、「タブカムDAY」に対しても依然として評価が低かった。これらの結果や上述の子どもの様子から、中高学年の子どもにとって、「友人との関係」がモチベーションを左右する非常に重要な要因となることがわかる。

4. 考察

以下、「タブカムDAY」の効果について検討する。

4.1 ホスト・ゲスト関係の転換

「発表会」はホスト社会である日本人児童のための教育の場であり、そこで発表を行うH教室生は「ゲスト」としてその場に迎え入れられる。一方で「タブカムDAY」は、自分たちが中心に位置づく場であるH教室において、日本人児童を「ゲスト」として迎える活動である。ここでは、H教室生が「ホスト」を務め、自らが見せたいと思う内容を主体的に選び、自らが見てほしいと願う相手を誘ったうえで、披露する。この「ホスト・ゲスト関係の転換」こそが、「タブカムDAY」がH教室生に好意的に受け入れられた要因であり、「ホスト」としての主体性がH教室生をエンパワーしたものと考える。竹田（2012）は、外国人児童・生徒が「日本人と同じように見て欲しい」、「日本人と異なっ

た部分を見て欲しい」と相矛盾する2つの欲求を持っていることを指摘したが、これは『ゲスト（＝周辺的な存在）』扱いしないでほしい、『ホスト（＝中心的な存在）』として自分の持っているものを見せたい」と言い換えることができないだろうか。

また清水・児島（2006）は、周辺化された外国ルーツの子どもたちを学校の中心に位置づけるように場面の構造を変化させていく必要があるということを教員自らが語り出し、その語りから生まれた「選択国際」の活動について紹介している。「タブカム DAY」は、「ホスト」と「ゲスト」の関係性を転換させることによって、この「場面の構造の変化」を起こすことができたものとする。

4.2 押し付けられた「ベトナム人」像

阿久澤（1998）は、「国際理解教育」の問題点のひとつとして、「国際理解教育」が日本人児童・生徒のための教育としてのみ位置づけられており、外国ルーツの子どもたちを力づける意識が希薄なことを挙げ、その結果、外国ルーツの子どもたちは「国際理解教育に向けられたひとときだけ、その『外国人らしさ』が積極的に評価され、取り上げられる」ことになる」と述べた。「発表会」に“のれない”H教室生は、「国際理解教育」のプログラム内に用意された「発表会」をまさにこのようなひとときだと捉え、居心地の悪さを感じていたのではないだろうか。「発表会」に「ゲスト」として参加するH教室生には、「ベトナム人らしい」振る舞いが求められる。これについて金（1999）は、在日三世の民族学級講師が、民族衣装を着て民族楽器を演奏することに抵抗感を覚えつつも自分を奮い立たせその役目を負う姿を、以下のように描いている。

『民族衣装を着て、民族楽器を演奏する朝鮮人』、それは支配文化である日本（人）社会が在日朝鮮人にあてはめがちな〈定型〉であり、“ステレオタイプ”であり、在日朝鮮人にとってそれは『客体化された本質』である。彼らは、個としては、そうした『民族文化を体現する自分』をよしとしてはいなくとも、朝鮮文化への接触が、在日朝鮮人問題の理解の契機になりうるかとも考え、日本人教師たちの求めに応じて、民族楽器を披露する。それは、引き受けさせられる『客観化された本質』を、彼らなりの意図と文脈において主体的に活用する『手段』への転換である。それは『見られる存在』から『見せる存在』への転換ということである。（中略）折り合いを彼らはこうしてつけているのである。

（金，1999, p.148-149）

H教室でも、2019年度の「発表会」直前の授業において以下のようなやり取りがあった。

筆者「S小学校のベトナム代表であるみんなから、ベトナムの素敵ところをS小学校のみんなに伝えられるよう頑張りましょう！」

児童（6年男児）「(獅子舞なんて) 練習すれば誰だってできるよ！」

（フィールドノートより）

この子どもの発言は、自分たちに「客観化された本質」を演じさせることを要求する大人たちのまなざしに対する反抗の表明だったのではないだろうか。さらに言えば、「発表会」だけでなく、H教

室への参加自体をそのように感じていることを訴えていたのではないだろうか。

これに対して「タブカム DAY」は、自分が H 教室で学んだことや自分が調べたことを伝えるというコンセプトであった。そのため、子どもたちは「ベトナム人」として「日本人」の前に立たされるのではなく、H 教室のいち学習者として友人たちの前に立つことができた。「ベトナム人」として「日本人」に「見られる」のではなく、ひとりの個人として学習成果を「見せる」ことができた。つまり、『見られる存在』から『見せる存在』への転換が叶ったのだと考えられる。そしてその際、ベトナムに関する事柄を「引き受けさせられる『客観化された本質』」ではなく「主体的に活用する『手段』」として捉えることができたのではないだろうか。

4.3 H 教室の存在意義および H 教室の活動を学校全体に「開く」ことの意義

「タブカム DAY」の実践では、場面の構造を変化させ、H 教室に通う子どもたちを場の「中心」に据えたまま他者の目（周囲の承認）を獲得することに成功した。またその際、文化的差異を「引き受けさせられる『客観化された本質』」ではなく「主体的に活用する『手段』」に変換することにも成功した。

川上・尾関・太田（2011）は、日本語を含む複数言語環境で育った後に来日して大学で日本語クラスを受講している留学生・大学生にインタビューを行った。その結果、日本語学習と密接に関連する要因に、彼らが幼少期より日本語とどのような関係にあったのかということがありと指摘し、それを「日本語との距離感」と呼んだ。また、それは人によって異なるし、学習の過程を経て変化すると述べた。

S 小学校において「ベトナムにルーツを持つ」という共通項の下に集められた H 教室生の間でも、ベトナムの言語や文化を日常的に感じる度合い、ベトナムとの「距離感」は子どもによって大きく異なる。H 教室が行うべきことは、ベトナムの言語と文化の学習を通して、子どもたちが自分自身の持つベトナムとの「距離感」を自覚するよう、その「距離感」は人それぞれ、その時々で異なり得ることを知るよう、そして、仲間が持つそれぞれ異なる「距離感」を尊重できるよう、励ますことではないだろうか。そうすることで H 教室生は、ベトナムにルーツを持ちながら日本に生きる自分とどう向き合うかを近い境遇の仲間とともに考えることができるのではないだろうか。そして、こうした学びを H 教室内に止めず S 小学校全体に「開く」ことができれば、S 小学校の教員・児童は、ベトナムにルーツを持ちながら日本に生きる自分とどう向き合うかを模索する友人の姿を通して、様々な「距離感」があることを知ることができる。それにより、「外国人」対「日本人」という二項対立的な見方から脱却し、多様性の実態を学ぶことになり得ないだろうか。こうした相互作用を生むことこそが、公立学校内に母語教室を設置する意義のひとつだと考える。

5. おわりに

以上、母語教室公開イベント「タブカム DAY」の実践について報告した。念のため付け加えておくが、本稿を以て「発表会」を否定する意図はない。多くの子どもたちの外国文化への興味・関心を育むためにも「発表会」は非常に大切な機会である。しかし、そこに外国ルーツの子どもたちを巻き込む際には、その子どもたちを力づける意識が働いているか、その子どもたちの多様性を尊重できて

いるか、ということイベントに関わる大人が問い続ける必要があるということをも自戒をこめて主張したい。

新型コロナウイルス感染症対策のため、小学校、中学校、高等学校および特別支援学校等における一斉臨時休業が要請されたのは、ちょうど第2回目の「タブカム DAY」の実施日だった。その後学校再開に伴いH教室の活動も再開したものの、様々な制限の下で実施せざるを得ず、2020年度中は「タブカム DAY」を実施することが叶わず、2021年9月現在も次の開催を確約できずにいる。2019年度の反省と2020年度中に温めた思いを次の開催に繋げるためにも、新型コロナウイルス感染症の終息を願うばかりである。

謝辞

本実践の実施にあたり、多くの方々の協力・支援を得た。S小学校の子どもたち、そしてH教室担当の先生をはじめとするS小学校の全教職員の方々、スクールサポーターの方々、H教室生の保護者の皆さまに心より感謝の意を表したい。また、いつも教室活動を温かく見守り適切なご助言をくださった神戸大学国際人間科学部准教授の落合知子先生に感謝を申し上げる。

注

- 1) 本研究はJSPS 科研費 20K21984 の助成を受けたものである。
- 2) 母語を「初めて覚えたことばで、今でも使えることば」(中島, 2003) であるとする、この教室に通う子どもの中にはベトナム語を「母語」としない子どもも多い。しかし、この教室は注3に示す通り、兵庫県教育委員会の「母語教育支援事業」に起源を持つものであり、周囲から久しく「母語教室」として認識されてきていることから、本稿でも「母語教室」という呼び方を採用する。
- 3) S小学校は兵庫県教育委員会「新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業(平成18～22年度)」により母語教育支援センター校(支援言語:ベトナム語)に指定され、H教室の活動を開始した。事業終了後、神戸市内の母語教育支援センター校7校は、日本語指導支援センター校として神戸市教育委員会に引き継がれ、母語・日本語指導の場として活動を続けている(落合, 2012; 母語教育支援センター校等連絡会, 2009)。
- 4) 筆者は、講師として子どもたちの前に立って指導を行いつつ、H教室の観察を続けてきた。佐藤(1992)は、フィールドワーカーの役割は固定して存在しているわけではないと述べるが、筆者も主に「完全なる参加者」と「観察者としての参加者」の間を揺れ動きながら、ときにはより「観察者」に近い視点から、観察を行っていた。H教室における筆者の立ち位置については、稿を改めたい。
- 5) 詳細は、落合(2012)、北山(2017)を参照されたい。
- 6) バトミントンのシャトルの羽根部分を長くしたような形の羽根を用いて、リフティングをしたり、蹴り合ってラリーを続けたりする遊び。中国の毽子^{ジェンズ}が発祥とされる。
- 7) ここでは、ベトナム語による会話のやり取りが可能な子どもを「ベトナム語力[高]」、ベトナム語を聴いてわかる、基礎的な単語はいくらか知っている子どもを「ベトナム語力[中]」、ベトナム語を聴いてもほぼわからない子どもを「ベトナム語力[低]」とする。現時点においてH教室の子どもたちのベトナム語能力を評価する調査は実施できておらず、今後の喫緊の課題としたい。
- 8) 参加者は輪になって並び、握った両手の拳を親指が上を向くようにして前に出す。ひとりが掛け声に次いで数字を宣言し、その宣言と同時に参加者は親指を立てるかそのままにするかを選択する。宣言した数字と立っている親指の数が一致すれば宣言者は片手を引っ込めることができる。失敗した場合はそのまま隣の人に宣言の権利が移る。これを繰り返して、早く両手を引っ込めることができた人が勝利するというルールでの遊び。地域や世代によって「いっせーのせ」「いっせーので」等様々な呼び方がある。
- 9) 毎年度の最終回に、6年生のH教室修了を祝う修了パーティーが行われる。5年生が主体となり、低学年クラス・中高学年クラス合同で行う。

引用文献

- 阿久澤麻理子(1998)「Ⅲ マイノリティの子どもたちと教育 11 日本の子どもたちの『国際理解』は進んだか」
中川明編『マイノリティの子どもたち』(pp. 104-107) 明石書店
- 落合知子(2012)「公立小学校における母語教室の存在意義に関する研究―神戸市ベトナム語母語教室の事例から―」『多言語多文化：実践と研究』4, 100-120.
- 川上郁雄・尾関史・太田裕子(2011)『『移動する子どもたち』は大学で日本語をどのように学んでいるのか―複数言語環境で成長した留学生・大学生の日本語ライフストーリーをもとに―』『早稲田教育評論』25(1), 57-69.
- 北山夏季(2017)「公立学校におけるベトナム語母語教室」松田陽子・野津隆志・落合知子編『多文化児童の未来をひらく―国内外の母語教育支援の現場から―』(pp. 37-49) 学術研究出版
- 金泰泳(1999)『アイデンティティ・ポリティクスを超えて―在日朝鮮人のエスニシティ』世界思想社
- 佐藤郁哉(1992)『フィールドワーク―書を持って街へ出よう』新曜社
- 清水睦美・児島明編著(2006)『外国人生徒のためのカリキュラム―学校文化の変革の可能性を探る―』嵯峨野書院
- 高橋朋子(2013)「中国帰国児童の主体的な関係性の構築を目指して」『異文化間教育』37, 15-31
- 竹田治美(2012)「外国人児童・生徒の内部葛藤とアイデンティティの模索―学校の多文化教育に向けて―」『奈良産業大学紀要』28, 79-89.
- 中島和子(2003)「JHL の枠組みと課題―JSL/JFL とどう違うか―」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB) 研究』ブレ創刊号(2010 年復刻版), 1-15.
- ―(2016)『完全改訂版 バイリンガル教育の方法―12 歳までに親と教師ができること』アルク
- 母語教育支援センター校等連絡会(兵庫県教育委員会)(2009)「平成 20 年度新渡日の外国人児童生徒にかかわる母語教育支援事業実践報告書」